

---

# まさよしとSOLA 食あたりになったのは、僕のせいじゃない

大蚊里伊織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まさよしとSOLA 食あたりになったのは、僕のせいじゃない

### 【Nコード】

N8917U

### 【作者名】

大蚊里伊織

### 【あらすじ】

銃を始めとする武器と、科学と並行して裏で進行していた錬金術と魔法が公に使われるようになった世界。魔力の根源と言われる深い森の調査委員で、たまにほかの仕事もするまさよしは、一緒に暮らす仲間とともにのんびりとした生活を送っていたが、ある日、少年二人に仕事を持ちかけられ、大きな事件に巻き込まれることになる。錬金術と魔法と科学の交差する世界で、話はてんかいする。無事日常にもどれることができるのか？

## （前書き）

闘いの場面などがあり、R15にしてあります。

細かな魔方阵が床に書かれていた。静かな部屋だ。衣を着た男たちが静かに行き交っている。あるものは何か呪文をとえ、あるものは魔方阵をさらに描いていく。

円陣の周りに数体の眷属獣がいて交代しながらそれを守っている。魔法政令都市ユータム。それは五つの「円陣の魔方阵」に守られた不夜の都市だった。

そして、話は始まる。

二人の少年がパブ、ホワイトスノウに入ってきたとき、男は遅い朝食をとっていた。

場所はリグラートの片田舎。酒と軽い食事を出してくれる店だ。片方の少年は黒い髪に黒い瞳をしている。もう一人は白い髪に緑の目だ。同じような軍服を着てマントをはおり、肩には銃をかけている。

「まさよしさんって人はここにいますか」  
白い方がそう言った。

金髪に大柄な男は少し考えるようにしたあと、声をあげた。

「まさよしは俺だ」  
手を振る。

「あの」  
「なんだ」

「僕はキラと言います。こっちはアサヒ」と言いだす。

「何の用だ」

「仕事を頼みたいのですが」

と言う。

アサヒと呼ばれた方の黒いのは、黙っている。

「何の仕事だ」

「僕たちを森の向こうまで送ってほしいんです。お金はあります」

まさよしは考えた。このところまともに仕事をしていない。会社から最低限のお金はもらっているが、生活はぎりぎりだ。朝食は昼食と一緒にして食費を浮かしている。

「わかった」

と答えた。

森はこの、店がある町リグラートの西に広がる。車で行く道が一本通っているが。

「ロウ」

まさよしはコップを磨いているパブの主人に声をかける。

「SOLAを借りるがいいか」

と聞くと、店の掃除をしていた髪の高い男が、顔をあげた。

「僕も一緒に行っているの」

「ああ」

「まだいいとは言っていないぞ」

ロウが言う。

「だめなのか」

「いやかまわないが」

どっちにしろ掃除にしか使えないしな。などと言う。

森の中はこいつと一緒にのほうがいい。とまさよしは思う。

「ポミュは」

SOLAが聞く。

「いいぞ」

まさよしはそう答え、キラと名乗った少年の方を向く。

「こっちの仲間は俺を含めて三人だ」

「森を抜けられるなら、何人でもかまいません」

キラはそう言う。

「その装備はやめておいたほうがいいかもな」

とまさよしは言った。

森を出てすぐに検問がある。民間委託のため、軍関連の人間は受けが悪い。

「来い」

まさよしはそう言うのと戸口のほうに向かう。

「SOLAは準備をしておけ」

そう言い残してまさよしは外に出た。二人もついてくる。

まさよしは今年二十三歳になる。体はどちらかというとがっちりしていて、実戦向けだ。

「検問を抜けるときに使う服を手にいれとく必要がある」

と言いつつ歩きだす。

街に数軒ある服を扱う店で、二人で選ばせる。

検問はまさよしは顔パスになっているくらいゆるいものだが、軍人は流石に通してもらえないだろう。少年兵らしい。とまさよしは思う。

森を抜ければ中央都市まですぐだ。

「適当に選んで買ったらここに来い」

噴水のある広場で椅子に腰を下ろす。

「わかりました」

無口なアサヒとか言う少年の方は返事もしない。黙っている。

少し離れて、まさよしは考えた。脱走兵だろうか。それにしては堂々としているが。ここに来るまでどういった経路でどうやってここにきて何を目的にしているのか。何も分らないが。まあ、仕事は仕事だ。割と危険なことでもまさよしはやったのけていたし、仕事は嫌いではない。

「まあ、なんでもいいか」

金はあると言ったが、言ったただけだからなあ。あとで踏み倒されたりするんじゃないだろうな。

そんなことを思いながら食糧も積もうと考える。あとで役に立つ

かもしれない。というのは勘だった。車にはもともと予備の保存食が積んであるが。なんとなくだ。まさよしはそういうときの自分の勘は大事にするほうだ。

「何にせよ行ってみてから考えよう」

まさよしはそういう性格だった。

「選んできました」

キラがそう言いつつ来た。紙袋を持っている。アサヒもだ。

「そうか、じゃあ車に行くぞ」

「はい」

「ああ、その前にちよつと寄るところがあるがな」

まさよしはそう言つと、歩きだした。

雑貨屋で缶詰をいくつか買う。

「これでよしと」

車の前で二人を待たせていた。

車はホロのかぶつた古いジープだ。乗っていいぞとまさよしが言う。まさよしが運転席に乗り込み、隣にポミュとSOLAが乗る。

「攻撃魔法は使えるか」

「僕はオールマイティに使えます」

とキラが答えた。

「アサヒは銃と火炎系の攻撃呪文しか扱えませんか」

「そうか」

まさよしは肉弾戦向きだが、回復呪文の簡単なものなら使える。

「まさよし、用意できたよ」

先刻SOLAと呼ばれていた男が走ってくる。

「こいつは僧侶系の呪文が得意だ」

と言う。

「この白い毛玉はなんですか。あ、動いた」

キラが聞く。

「ポミュ」

と、SOLAが答えた。

右手に乗せると、しゅるんと触手が中から出てきて、あたりを触ったあとまたしゅるるんと中に収納される。

「かわいいでしょ」

と言いつつかばんに入れている。キラの笑顔が多少凍りついたようだが、気にしない。

「出発！」

とSOLAが言うのと、ああ、とまさよしは言った。

森を抜ける前に車がエンストを起こしたのは自分のせいじゃないと思いながら、全員で歩いていく。食料は分担して持った。この時期、モンスターが活発で車で森を突破する人間は少ない。森を迂回するか、冬まで待つかどちらかである。あとはまさよしのようなベテランの冒険者がたまに行くくらいなものだ。よって、他に助けをもとめて車でなんとかという線は消えた。

食料を余分に積んでおいてよかった。とまさよしは思う。

「ついてないな」

と言いつつ歩く。

「なんか鳥の鳴き声もしませんね」

キラが言う。

「囲まれたか」

とまさよしが言った。

茂みがわさわさと揺れた。

一頭の牛のような生き物がこちらに向かってくる。

「アサヒ」

「ああ」

火炎弾と言いつつ右手から炎を放つ。

「ウシモドキか」



まさよしが言いつつ大人の身体ほどのモンスターが魔術を使ってくる前にこぶしで殴った。

連携プレーをしてくるモンスター群はたちが悪い。キラが呪文を使う。

「氷河」

氷系の呪文のかなり高いレベルの魔法だ。広範囲を凍りつかせばりんと割れた。

アサヒが撃ち抜いた。ウシモドキの目を。苦しんで突進してくるのをよける。

SOLAがポミュを投げる。

ポミュがそらを飛ぶ羽の生えた缶のような小型モンスターの首にまきついて、おとした。呪文を使う前にSOLAが踏みつぶす。

「えいえい」

などと言っている。弱いモンスターは呪文を使えるようになることで身を守っているのだ。

まさよしは刃渡りのあるナイフを取り出してまた突進してくるウシモドキの反対の目を狙って突き立てた。

その場でぐるんぐるんと首を振りながらウシモドキが声をあげた。仲間を呼んでるよ、逃げなきゃ」

SOLAが気づいて叫ぶ。

「全員逃げるぞ」

まさよしがそう言くと、全員は走り出した。

途中、旧研究所跡で野宿した。

「ここで出会ったんだよね。僕たち」

「ああ」

SOLAが眠れなかったらしく、火の番をするまさよしのところに来た。

「あのときは」

「ん？」  
「お前を見つけて驚いたが」  
「うん」

あの日は雨が降っていた。とまさよしは記憶している。服はびったりと体にはりついて動きを重くさせていた。髪の毛から水が滴って目に入る。ひどい酸性雨だった。手で擦ったが、鈍い痛みが残る。低く垂れこめた雲から絶え間なく降り注ぐ雨はまさよしを憂鬱にさせた。

「ここで雨宿りするしかないな」

森の途中にあるかつて何かの研究をするために建てられたという建物だった。何重にもつたが絡まり、灰いろの建物はさらに暗く見えた。噂はいくつかあったが、あまり中に入ったという人間はいなかった。なんとなく不気味だから、というのが大半の理由だ。あと、どうやら防衛システムが生きているらしくて、逃げてきた人の話も聞いていた。

まさよしは中に入る。横開きのドアが音もなく開いた。防衛システムがあるかどうかは分からないが、動力は生きているようだ。しばらく歩く。

と、人が倒れていた。

「おい、大丈夫か」

旅人にしては何も持っていない。人間か、モンスターかいぶかったが、まさよしがゆすると起きた。

「あ、人？」

「ああ、人だ」

「良かった」

「ん」

「僕SOLA。ソーラ。人造人間です。錬金術でつくられました」

おなががすいて動けないんです。とSOLAは言った。まさよし  
が持ってきていた固形食糧を与えるとがばりと起き上がり、食べて  
いいのと聞くのでああと答え、はぐはぐと食べた。まさよしはじっ  
とみている。人造人間自体は別段珍しいものでもない。どうやら危  
険ではなさそうだ。

「僕は不良品で」

「不良品？」

「自我があつたらいけなくて、でも自我ができるのはなぜかという  
実験をして僕はこの奥でカプセルの閉じ込められて。もう解剖と  
かいろいろ痛いことされるのになって思つて眠りについたんだけど、  
それきりで。この動力がなくなってきたみたいで、ぼくは目覚め  
させられて起きて」

と言う。

「助けてくれてありがとうございます」

「いや、別にそれはいいが」

部屋のなかはひんやりしていた。

「この動力はどうなってるんだ」

「わかりません」

僕が外に出ようと中からのロックは全部外したんですが。

ちゃんとあのころは丁寧なものの言いをしていたなあとまさよしは  
思う。

長い髪は金色で、目は深い緑をしていた。今も同じ姿だ。年はと  
つていくようだ、人間と同じようにとるのかどうかは知らない。

「そとはけっこうモンスターがいるから、出るに出られなくて、そ  
のうちおなががすいて動けなくなって」

と言いながらSOLAは奥の部屋に行き、袋を持って出てきた。

「これをあげます」

「なんだこれは」

「秘密です」

「そうか、まあいい」

まさよしは袋の中身も見ずに受け取って立ち上がる。

「一緒に来るか」

まさよしは言った。

「はい」

と答えにつこりと笑った。

「僕はこれでも回復系の魔法は使えますから」

「そうか」

あのときもジープが使えなくなって大変だったんだ。部品さえあればなおる程度の故障だが、森の真ん中でそんなものはなかった。ので街まで引き返す途中だったのだ。

雨はまだやまないようで、静かに雨音が聞こえてくる。

「雨がやんだら出発する」

「はい」

やがて雨がやみ、外に出る、とSOLAが木の間から見える空を指差した。

「虹」

「ああ」

きれいな虹が見えた。

話をもとに戻そう。

何度かモンスターの襲撃を受けながら森の出口にたどりついたのは次の日の夕方だった。

「着替える」

「はい」

二人が着替えるのを待ち、まさよしは窓口に立つ。

「ちよっと出稼ぎに行くんだが、通してもらえるか」

「ああ、まさよし」

「仲間がちよっと増えて」

「そうか、じゃあこの用紙に書き込んで」

などと言われて、適当に名前を書きこんで通り抜けてしまう。流石に心臓が痛い。

荷物を入れたかばんのチェックさえなかった。信用されているとは思うものの、やはり通り抜けてしまうまでは気が抜けなかった。

全員で窓口が見えないところまで歩く。

「なんとかここまでこれたな」

「ありがとうございました」

キラが言う。と、アサヒが突然銃を出した。

「なんのつもりだ」

まさよしが言う。

「アサヒ」

キラが言う。

「こいつらは殺すべきだ」

「この人たちは悪い人たちじゃないよ大丈夫だって」

「キラ」

アサヒが言う。

「俺達が動いているのを知られるのはまずい」

この平和な辺境で兵士のかっこうをするほど目立つことはないと思うのだが。そのことは気づいているのかいないのか。アサヒが銃を持ち直す。

「お前たちの旅の目的はなんだ」

まさよしは聞いた。聞いたら後にはひけなくなる。なぜかそう思ったが、まさよしは聞いてしまった。

「シールド」

SOLAが呪文を唱えた。高度な僧侶呪文のひとつで、アサヒとキラの周りに張られる。物理、魔法両方の攻撃を結界より外にできなくさせるものだ。

「僕を甘く見ないでね」

アサヒが銃をおろした。

「レインボープロジェクト」

「レインボープロジェクト？」

「ああ。俺たちの国で行われた魔導士狩りの名前だ」

「それをこの国でもやろうとしている人たちがいるんです。それを止めるためのゲリラ集団の中で僕たちは働いています」

「魔導士狩り」

まさよしはうなった。

「噂は本当だったのか」

「うわさ？」

「ああ、噂だ。L I S……俺が所属する会社の上の方がな、隣の国がきな臭いと言って話していたんだ」

「レインボーってなんかきれいな名前」

S O L A が言う。

「きれいなものか」

アサヒが言った。

「僕の父親がレインボープロジェクトで連れていかれて帰っていないんです。アサヒは両親が」

「そうだったのか」

まさよしは言った。

「俺たちも行こう」

とまさよしは言った。

「アサヒ、一緒に来てもらおうよ」

「キラ」

キラの言葉に、アサヒはため息をつき、やがて言った。

「わかった」

と。

「まさよしくんには僕だつてついていくもん」

「S O L A」

「なに？」

「二人の結界をといてやれ」

「はい」

手をあげて、解呪と叫ぶと消える。

全員が、歩きだす。歩きながらキラがまさよしに語りかけた。

「ありがとうございます」

「いや、いいんだ」

「この先に俺が育った教会がある。そこに寄って一泊しよう」

まさよしが言う。

まさよしには親がない。孤児として育った。だから、親というものの概念は分らないのだが、大事なものだという認識はあった。家族はいたし、大事なものだとも思っていたからだ。

SOLAが古い歌を口ずさみながらポミュを抱きかかえている。  
ポミュは丸い毛玉だ。

「どうしたのポミュ」

SOLAが言いつつポミュを離れた。と、転がったポミュが白いワンピースを着た少女に変化する。

「ミュ」

ポミュは擬人化することのできるモンスターなのだ。

「ああそうか」

SOLAが笑う。みんなに触られるのいやなんだ。と言う。

白い毛玉のままで行くと、教会の子供たちに揉みくちやにされるのだ。小さい子供は愛情が凶器だからなあ。とまさよしは思う。

教会へ行く道に曲がって、しばらく歩くと教会が見えてきた。小さな教会で、そのとなりにある建物が孤児院だ。外で遊んでいた子供の一人がまさよしだと叫ぶと、ほかの子供たちもわらわらと出てきた。まさよしはそのうちの一人が走ってくるのを抱きとめる。

「この人たちは？」

その後ろから、長そでにスカートをはいてエプロンをした女が来て言う。

「旅の仲間だ」

「そうなの」

「今日は一泊させてくれ、明日には出ていく」

「今回は長いのか？」

「わからないな、長いかもしれない」

「そう」

まさよしの幼馴染で、今の孤児院を支えている人だ。名前はセイという。

「セイ」

「なに」

「今日はマザーは」

「いらつしゃるわ」

「そうか」

マザーというのは、教会の尼をしている人で、まさよしの育ての親だ。まさよしはお金ができるとここに寄付に来る。

「泊るところを用意しますね」

「ああ、ふた部屋あればいい」

アサヒとキラは一緒にいいし、まさよしとSOLAとポミュは一緒にいい。

「わかりました」

セイが言うにつこりと笑う。

「私にはまさよしの仕事が分からないけど、でもあまり危険なことはしてほしくないわ」

「ああ」

「心配なのよ」

「わかってる」

幼馴染のセイは、そう言うところりと向きを変える。

「さあ、昼ごはんにしますよ」

「わー」

子供たちが競って部屋に戻っていく。



アサヒとキラも無言でついてくる。SOLAはポミュの手を引いてついてくる。

「セイさん」

SOLAが言う。

「何？」

「まさよしくんは僕がついてるから大丈夫」

「ええ、分かってるわ」

SOLAはあつてはいけない人格を持ち、呪文をマスターし、食事をして息をして普通に生活する人造人間だ。

ふだんはでもパブの掃除くらいにしか役に立たない。

セイはまた笑う。

「あなたたちの冒険の話をもた聞けると思つとうれしいわ」  
「うん」

昼ごはんは、パンとスープ。

質素だが、暖かいスープは美味しい。

「おいしい」

とキラが言う。

アサヒが無言でゆっくり食事している。SOLAはパンをちぎってスープに浸して食べている。まさよしはパンをかじりながらポミュのほうを見た。ポミュは食事をしないので、椅子に座ってぼんやりしているようだ、ようだ、というのは表情がなくて何を考えているのかさっぱり分からないモンスターだからだ。突然変異なのか、なんなのか分からないが、森でSOLAが拾った。森の中で白色が目立つ。のではないかと思うのだが、そのせいで親にでも捨てられたのだろう。白色のモンスターだった。

「食べた？」

セイが言う。

「ああ」

「食べたら仕事」

「何をすればいい」

「洗濯の手伝い」

「わかった」

子供たちは遊ばせておいて、木のたらいで洗濯をする。

一番近い村で作ってもらったたらいだ。

「まさよし」

「なんだ」

「ぽみゆがいない」

「いない？」

「探してくる」

と、SOLAが言う。

「迷子になるなよ」

「わかってるって」

まさよしはなんとなく厭な予感をかかえながら、洗濯物をこしこしと擦る。

アサヒとキラは黙って洗濯物を干している。

「わああああ」

と子供たちの声がして、SOLAの音がそれに重なる。

「シールド」

「なんだ」

まさよしが洗濯の手を止めて、建物の裏手に入る。

子供が数人倒れていた。

「どうした」

見ればぽみゆが腕を触手に変えてウシモドキの首に巻きついていている。

「ウシモドキか」

ぽみゆの触手がよほど苦しいらしく、反対の方に走って逃げている。ポミュが離れてぼたと落ちる。と、少女の姿に変わった。

「このあたりにもモンスターが出るのか」

出てきたセイに聞く。

「ええ、最近時々ね。ほとんどは村の方に出るのだけど、たまにこ

ちらにも出るわ」

「子供たちにけがはないか」

「大丈夫、ぼくがシールド張ったから」

SOLAが言う。

「解呪」

手を前に出して印を結び、子供たちを包んでいた結界をはずす。

「農作物をだいぶ荒らしてるらしいの」

セイが言う。

「今年は夏が短いみたいで、それを察知して出てくるみたい」

「そうか」

「マザーがそうおっしゃっていたわ」

餌を求めてここまで来るのだと。

セイが言う。マザーは昔魔女だった。ある日迷い込んだ子供を保護して、子供を保護する仕事をしようと思いたち、出家した。

「マザーに会えるか」

「会っていくの？」

「ああ」

「まさよし、また喧嘩しちゃうわない？」

「大丈夫だ」

まさよしとマザーはしょっちゅう喧嘩するので、セイはあまり会わせたがらない。マザーのぜんそくの発作が出るからだ。

「たまには顔を見たい」

まさよしが言う。

「珍しいこともあるわね」

いつもは会いたいなんて言わないのに。

「そうだな」

「厭な予感というやつかしら」

「ああ」

まさよしが立ち上がる。

「奥か？」

「ええ」

廊下を通って奥へ。

入っていく。

机の上に載せられたパンが半分になっている。半分しか食べられないのだとまさよしは気づく。

「元気か」

「まさよしかい、また来たのかい！」

「元気そうだな」

「ふん、元気で悪いかい」

まさよしは笑う。

「顔を見に来た」

まさよしが言うと、マザーは静かにまさよしを見た。

「今度の仕事は長くなる気がする」

「そうかい、せいせいするよ」

「ああ」

椅子に座ったマザーがそう言う。もううまく歩けないのだ。移動はもっぱら車いすだ。

まさよしは笑う。

「今日は泊っていく」

「そうかい」

マザーは言うため息をついた。

「まだ危険なことをするつもりだねえ」

「ああ、他に仕事はないしな」

「セイを泣かせるんじゃないよ」

「わかってる」

まさよしは部屋を出た。

星空が怖いくらい綺麗に見える。まさよしは窓から外を見た。静かな夜だ。明日はどうなるか分からないがよく眠ったほうがいい

いだろう。

星に願いをかけるほど、ロマンチストではない。でも、この星空をまた見たいと思う。どうも今度の仕事は厭な予感がしているのだ。ゲリラ側に加担する、とは要するに政府にたてつくということでもある。今のところまさよしが住んでいるところではレインボープロジェクトは行われていないが、レインボープロジェクトで一体何をするつもりなのかも知りたかった。

「厭な予感ってのは当たりやすいしな」

呟く。と、「もう食べられないけどまだ食べる」と横で声がした。SOLAだ。良く寝ていると思ったが、と見ると寝言だったらしい。寝がえりをうっている。

「俺も寝るか」

と言うと、まさよしはふとんをかぶった。

静かな夜の帳がまさよしを包みこみ眠りに落ちた。

朝から快晴だった。

まさよしは外に出る。

井戸で顔を洗い、タオルでふくと、子供たちの起き出す音がする。

SOLAが目をこすりながら出てきた。

「まさよし」

「なんだ」

「変な夢見た」

「そうか」

「ドームが真っ赤に燃える夢」

と言いながら、井戸のポンプを動かして、水を出して顔を洗う。

「予知夢か」

「うん。分からない」

SOLAの力のひとつ、夢見。たまに当たることがあるのだ。中央が燃えたら大変なことになるな、とまさよしは思う。

「力、また安定しなくなってるんだ」

SOLAが言う。僕欠陥品だしねえ。と呟くように言いながら顔をふいている。

「まあとにかく彼らと一緒に行動してみるしかないね」

知った以上、やりとげるつもりでしょ、まさよしくん。

SOLAに思考を読まれた、とまさよしは思う。ぼんやりのらりくらりと生きているようで、SOLAはいろんなことを考えている。

「俺の思考を読んだか」

「うん、なんとなくお人よしのまさよしくんのことだからそんなところだろうと思って」

「……うるさい」

「うん、ぼくうるさいよ」

くすくす笑いながらSOLAが部屋に戻っていく。

「朝食のパン作り立てらしいよ」

と言が残して。

「パンか」

のんびりと歩く。中央まで歩くのはこれから大変だなと思いながら。

朝食を食べ終わり、食糧をリュックに詰めて、まさよしたちは出発した。二人の少年は普通の服を着ている。軍服は背負っている。捨てるか迷っていたようだ。

歩き始めると全員無口になった。

モンスターが数回出たが、なんとか切り抜けた。

少しずつ二人のスキルが上がっているなと思う。戦う中で強くなっていくのだ。

日が傾いて薄暗くなってくる。まさよしが立ち止まった。

「強行軍はやめたほうがいいな」

二人がつかれているのを見て、まさよしは言う。

「ここで夜営をする」

「わかった」

アサヒが言う。キラは返事をする体力も残っていないようだ。うずくまる。

木を運んできて火をつける。

「夜は火を絶やすわけにいかないからな、順番に起きて火を見るぞ」

「キラは寝かせてやってくれ」

「そうだな」

キラはもうとうとうとし始めている。

「俺がその分起きる」

とアサヒが言った。

「そうか」

まさよしはそう答える。ここまで二人きりでよくやってきたものだ、とまさよしは思う。隣の国から越境するのはおとなでも大変だ。今は沈静化してはいるものの隣の国との正式な国交はいまだになされていない。戦争がまたくるのではないかという見方もある。

「戦争か」

まさよしは戦争孤児だった。教会に引き取られ、手のつけようのない悪がきだったのを、マザーは受け入れてくれた。この悪がきがいつも言われながら、でも育って教会を出て、稼いだ金の半分は孤児院にいれている。

昼間、歩いているときにキラが言っていた。

「ぼくたちは戦争を経験していません」

キラが言う。そうだろう。まさよしは思った。

「でも戦争を繰り返してはいけないというのは分かります」と言った言葉に嘘はないだろう。

「本当は戦争は終わってないのかもしれないな」

とまさよしは言う。

「ああ」

アサヒが答える。

同じ言葉を使い、同じ宗教を信じ、それでも国の引いた国境線に殺し合う。それがいいことだとは思えない。

戦争が終わったと政府が言ってから十五年。まだくすぶる火種があるのだ。

「レインボープロジェクトがどういったものだったのか、分かるようにもう一度説明できるか」

「わかった」

アサヒが言う。

キラはもう眠ってしまっている。アサヒはそつとマントを被せた。レインボープロジェクトは、魔導師たちの持つエナジーを集めて兵器をつくるという計画の名前だ」

そこまでは調べた。と言う。

「兵器を発動させて隣国と故郷で同時に攻撃して、中枢を破壊して制圧する、という計画らしい」

聞かなきゃよかったなとまさよしは思う。

「俺たちはこのプロジェクトをつぶすために動いている」

「そうか」

まさよしは言う。

「両親が連れて行かれたと言っていたな」

「ああ」

「いつだ」

「おとしのことだ」

「そうか」

「俺たちは親がいなくなって収容された軍の少年軍部隊で知り合った。キラは母親がもといないからな、父親がいなくなったら放り込まれた。俺は両親がいなくなって放り込まれたんだが」

「情報はどこで得たんだ」

「キラがコンピューターに接続された時に逆にコンピューターの中を探ったと言っていた」

「そんなことができるのか」



「ああ」

キラの特殊能力なんだ。と答えながらアサヒがため息をつく。

「二人で逃げてきた」

「二人きりで？」

「仲間がいる」

と言う。

仲間、か。

まさよしは思う。

「とりあえず俺たちはこちら側の国を任されたんだ」

「動かないよりは動いたほうがいいな」

「ああ」

「少人数で動いたほうがいいと、二人でここまで来た」

「大変だっただろう」

「俺の両親ほどの大変さではないはずだ。まだ生きているかどうかも分からないが」

「そうか」

「あんたは、あの孤児院で育ったんだろう」

「そうだ」

「SOLAに聞いた」

とアサヒは言う。寡黙だと思っていたが、意外にしゃべる。

「俺は親を知らない」

とまさよしは言う。

「でもまあ、それでも生きているがな」

親との絆とか、そういったものは分からないが、家族が大切なものだということは分かっている。教会の人間はみんな家族だ。

「どうした」

うつむいた顔に影が落ちる。

「親なんてどうでもいいと思っていたんだ」

「そうなのか」

「ああ、俺の家族はバラバラだった」

アサヒは言う。

「厳格なようで愛人を囲う父親と、それに従っているようで不倫をしていた母親と、俺という家族だったんだ」

「そうか」

「ああ、俺はそれがいやで家を出ようと思っていた。その矢先だったんだ、今度のことは」

アサヒはそう言うため息をついた。

「すまない、こんな話をして」

「いや、別にかまわないが」

「話すつもりはなかったんだが、あんたには話しても大丈夫かなような気がしたんだ」

まさよしは少し笑う。

「まだ若いんだ、いろいろある」  
十代か。

俺の十代のころはもう仕事をしていたな。とまさよしは思う。まさよしは森のデータをとる仕事をしていた。モンスターがどこにどれくらいいるのか調べて中央へ送る仕事をしていた。金がどこから出ているのかは知らないが、それなりにお金になる。体をはって仕事をするのだ、割に合わない金額だとは思うが、他に仕事がない。いや、仕事はあるのだが、人を殺すとか人を拉致するとかそういう危ない仕事が多いのだ。世も末だ。

「戦争が終わって十五年か」

アサヒもキラもお金のあるうちに生まれたようだなとまさよしは思う。言葉の発音がきれいなのだ。まさよしの発音はかなり訛りが入っているのだが、まあ会話はできる。

「俺は八歳の時に戦争が終わったんだ、両親がいついなくなったのかは分からないが、気づけばストリートチルドレンだった。まあ孤児院に入ったのはそのあとだが」

今二十三歳だ。

「俺は悪がきで。町でも何度か保安官のお世話になっていた。すり

の常習犯だったんだ」

「すり」

「ああ。知らないのかすり」

「なんだ、すりというのは」

「気づかれないように人から金を取る人のことを言うんだ」

「そうなのか」

「ああ、金のありそうな人間にぶつかりざま財布を抜いて生活していた」

「そんな過去があるのか」

「ああ」

でもマザーはそんな俺を拾ってくれた。と言うと、アサヒは笑う。

「喧嘩の声、下まで聞こえていたな」

「ああ、喧嘩できるうちは喧嘩しておこうと思っている」

マザーも歳だ。いつか話しもできなくなるんだ。と思う。

「もう寝ろ、しばらく俺が火を見ている」

「ああ」

アサヒがキラの横に横たわる。まさよしは火を見つめながら考えた。魔導士として素質のある子供も孤児院にはいる。子供たちが連れていかれて兵器の材料にされたらと思うと腹の奥からいやな感情が湧きあがった。

「厭な予感ばかり当たるから俺は」

呟きながら火に枝をくべた。

夜中に一度アサヒと火の番を代わり、明け方近くはSOLAが番をしていた。

「来る」

SOLAの声で目が覚めた。朝一番で何事だと思い、まさよしは起きる。

「何が来る」

「わからない、でも大きなもの」

アサヒとキラも目を覚ます。

「鳥だ」

キラが叫ぶ。

「怪鳥カレンドか」

「なんで今みたいな時期に？」

まだ春先である。もっと暑い時期に渡ってくる渡りをするモンスターだ。

「伏せて」

SOLAが叫ぶ。

全員が背を低くする。

すれすれを飛びながら警戒音を発する。女の悲鳴のような甲高い声。

「巢の近くで野営したみたいだな、逃げよう」

荷物を持って走りだす。

何度か鳥が旋回していたが、やがていなくなる。

「よかった」

キラが言う。

「この先はモンスターも減る、中央まではいくつかの街を通る」

まさよしが地図を出す。

「これが地図だ」

紙を広げる。

「ここがいまいる地点。ここを超えると一週間ほどは人家のないところを通る」

だがモンスターは出る。

「食糧になるモンスターが出たら基本的にそれを食べるようにする」  
まさよしは言いながら地図をずっと指でたどる。

アサヒとキラは覗きこんでいる。SOLAは退屈そうにあくびした。

「とにかく行こうよ、中央まで」

SOLAがそう言うと、全員が動き出す。

「そうだな、とにかく行ってみよう」

とまさよしは言う。いやな予感を振り切るように歩き出す。

中央まで二週間で着いた。最速記録だと呟きながらまさよしはとりあえず宿をとることにする。いつも泊っている宿で手続きを済ませ、食事をし情報を集めることにする。

「何食べよう」

ウシモドキの肉ばかりだったから、なんかおいしい野菜が食べたいな。とSOLAが言う。

「野菜か」

サラダサラダ。と言いながら店に入っていく。無国籍料理パイジヤン。いきつけの店だ。

「おいしそう」

バイキング形式の店だ。まず人数分金を払い、入って好きな料理をとって食べる。

「キラ、もっと食べたらどうだ」

アサヒがそう言いながら何かの肉のから揚げをとっている。

「うん」

キラは小食らしく、食べないのだ。

「調子悪いの？」

SOLAが聞く。

「そうじゃない、食べられないんだ」

不安で。と、キラは言う。

「無理しないで、少し休んだほうがいいかも」

SOLAが言う。

「大丈夫です、体がどうというのではないので」

キラがそう言いながら白い髪を耳にかける。

「しんぱいかけてすみません」

「いいけど」

SOLAが言う。

「不安か」

まさよしが聞く。

「はい」

緊張と不安は失敗を連れてくるものだ。

「リラックスリラックス」

「お前はリラックスしすぎだ」

「え」

まさよしはSOLAに軽口をたたきながらコーヒーを取りに行く。  
飲み物も飲み放題だ。

「おいし」

SOLAが言う。

SOLAはやたらに食べる。どこにそのエネルギーが消えているのか、太るということはない。どうなってるんだろうなあとまさよしは思う。

錬金術か。

歴史の裏で絶えず行われていた錬金術と、魔法。それが科学と融合し、今の世の中を作っている。混沌の時代が来た、とは200年ほど前の錬金術師の言葉だが、今も混沌は続いている銃と剣と魔法の世界。それがいまの世界だ。

食事が終わると宿に向かう。

「でもさ」

「なんだ」

「人体実験はしちゃいけないのに人造人間には実験してもいいって変だよ」

僕にだって人格あるしさ、機械人間のほとんどにも人格らしきものってあるでしょ。

「ああ」

「僕は実験を免れたけど、今も僕みたいになつくられた人がいるのか

な」

「そうだな」

「僕はそういう人を見つけて知りたいことがある」

「なんだ」

「教えない」

SOLAは言う。

「まさよしくん絶対笑うから」

「そうか」

まさよしは薄く笑った。ほら、笑う。とSOLAが言った。

不思議に心が落ち着くやりとりだなとまさよしは思う。

「そろそろ寝るぞ」

「はい」

ほみゆが部屋の隅に転がっていく。寝る位置を決めたようだ。SOLAが壁際のベッドにもぐりこんだのを確認したあと、まさよしは電気を消した。

夢を見た。かつての仲間の夢だ。故郷を出ていき、もう何年も便りがない。

何が正しいんだろうな。

彼の口癖だった。

まさよしはその声にこたえようとして声が出なかった。正しいことなんて世の中にはないんだと彼はよく言った。いつも何かを隠しているようだった。何を隠しているのか聞きたかったが、最後まで教えてはくれなかった。今もあの時、お前は本当は何を考えている、と聞けばよかったと思う。彼は振り返らず出て行った。

夢か。

目覚めてしばらくぼうつとしていたが、まさよしはしばらく余韻

に浸っていた。思いだすということはあいつがまだ元気に生きている証拠のような気がするのだ。俺の中にある限り、生きている。とまさよしは思う。しばらく考えていたが、やがて目を上に上げると裸電球にポミュがくつついていた。

「なにやつてるんだ」

つぶやくとほとつと落ちてきて、まさよしの顔を直撃した。

「つつ」

ポミュをつかんで下ろす。すると移動して、SOLAのベッドに上がっていった。

「なんなんだ」

寝ぼけたのか？　と思いつつ起き上がる。今ので完全に起きてしまった。

「もう食べられないよ」

SOLAがまたつぶやいている。食べることしか頭にないのか。とまさよしは思いながらベッドから降りた。カーテンをあけると町並みが見えた。

高い建物とそうでもない建物が同居している。

「静かだな」

窓ははめ殺しの窓だ。遮音してあるようだ。

「なんとかしないとな」

まさよしはひとりごち、黙りこむ。眠る気が失せてしまった。

静かだった。

SOLAが寝がえりをうつごそごそという音がイヤに耳につく。

なんだろう。今自分は不安なのか？　と思う。不安。普段の生活だつて不安じゃないとは言えないわけだしと思う。話がでかくてついていけないとも思う。体を動かすのは嫌いではないし、体ひとつで仕事してきた。だが、今は違う。考えなければならぬ。

「考えるのは得意ではないしな」

考え込む。

「あいつがいたらな、どんな答えを出しただろう」



まさよしは思うが。

「眠れないの？」

と声がしてSOLLAのほうを見ると目をこすっていた。

「起こしたか」

「ん……そうじゃないけど。トイレ」

「行つてこい」

「うん」

「ごそそとトイレに消えていく。」

「考えても仕方がないか」

まさよしは思う。

ぐるぐる回っている思考を持て余す。考えなくてはならないが、考えたとしても答えはない。正義なんてただのまやかしだ。

戻ってきたSOLLAがこちらを向いた。

「まさよしくん」

「なんだ」

「まさよしくんはもう選んだんだから、この道を実つ走るしかないんだよ」

運不運はあるけど、それでも生きなきゃなんないのはみんな同じだよ。とSOLLAがあくび混じりに言う。

「ね」

「ああ」

「じゃ、寝る」

「ああ、お休み」

「お休み」

SOLLAはことんと眠る。

まさよしも目を閉じた。そのまま眠ってしまったのだと気づいたのは翌朝だった。

「おはよーまさよしくん」

「ん」

SOLLAの明るい声が聞こえる。眼をこする。

「今何時だ」

「九時！」

「寝過ごしたか」

「早く着替えてごはん食べに行かなきゃ」

「そうだな」

朝食は頼んでいないので、適当に食堂を探さなければならない。  
着替えて外に出る。

アサヒとキラもちょうど部屋から出てきた。

「おはようございます」

キラが言う。アサヒは無言だ。

「ごはん食べに行くよ」

SOLAが言う。

「わかりました」

キラが言う。疲れはとれた？ とSOLAが聞いて、二人で会話している。まさよしはそれを見ながら後ろからついていく。

アサヒは無言で先頭に行く。

「で、ね、どこで食べよう」

「外に出てから決めるか」

「うん」

宿のフロントを通り、外に出る。

朝から辺りには屋台が出ている。

「ごはんごはん」

適当な店に座って、注文する。おかゆとおかずのセットが出てきた。全員同じものだ。

「とりあえずこんなところ」

「そうだろうな」

SOLAはいつも数軒はしごする。

まさよしもかなり食べるほうだが、SOLAの食欲は桁が違つ。

「先に戻っててもいいよ」

「いや、お前が迷子にならないならそうするが」

まさよしは言う。

「迷子になんかならないもん」

「過去そういつてならなかったことがあったか」

「ないけど」

「ぼくたちは戻ってますね」

「ああ」

俺はこいつに付き合う、と言いつつまさよしはコーヒーを注文する。

「まさよしくん」

「なんだ」

「今日はどうするの？」

「とりあえず情報を集める」

二人がいなくなったところで話を始める。

「どこで」

「情報屋を当たろう」

「知ってるの」

「まあ、少しな」

危ない橋を渡ったことがないわけじゃない。普段の仕事だけでは金が足りないときにした仕事のスキルが役に立つだろう。

「まさよしくん」

「なんだ」

「なんかあの二人だけにして大丈夫かな」

言いながらSOLAがメニュー表に手を伸ばす。

「あ、これとこれとこれください」

などと注文する。

「大丈夫だと思うが」

心配になってくる。

ぼみゆがみゆーと鳴く。

「ごはんのお金も持ってないだろお前」

「うん」

SOLAの食費はまさよしが稼いだ金で賄われている。まあでもSOLAのかげで怪我はすぐにに治せるようになり調査での危険はずいぶん減ったわけだし、一年の半分以上を森ですごす二人は、食糧には困らない。食べられる獲物を探せばいいからだ。

「おいていけない？」

「ああ」

まさよしの言葉にSOLAが笑う。

「過保護だってまた言われるよ、マスターに」

「ロウにか」

「うん」

でもまあ、いいけどね。とSOLAは笑う。

「さて次の店」

「まだ食べるのか」

「もちろん」

まさよしはため息をついた。屋台で食べると食事はどこも安い。

無許可で路上でやっているため、金をその分払わなくていいからだ。

「あ」

「なんだ」

「あれ食べたい、前に食べたやつ、なんだっけ」

「食べ物で忘れることがお前でもあるのか」

「あるよ！」

うーんとうなるSOLAを見つつ今度は酒を頼む。

「昼間から酒？」

と咎めつつまた何か料理を頼んでいる。

「あ、思いました」

料理がまたたくまに運ばれてくる。それを片っ端から食べている。

「思いましたか」

うん。と言いつつスープを飲み干す。

「じゃあいこう」

「待て」

「もう、おいてっちゃうよ」

ビールを一気におおり、立ちあがる。

「待て」

「ん？」

「何か来る」

まさよしが構える。ぎゃうーと鳴き声がして鳥が飛んでくる。複数だ。

まさよしに襲いかかる。見たことのないモンスターだ。

「なんで俺のところに」

言いながらくちばしをよけて腹を殴ると一羽落ちた。

「逃げるぞ」

言いだし、走り出す。

「待って」

「お勘定！」

店の店主の声も振り切りながら走る走る。ポミュをかかえてSOLAも走る。

ついてくる鳥たちは、飛びながら急降下してきて、まさよしの髪すれすれを飛ぶ。

「ほ縛」

SOLAが呪文を唱え、振り返りざま術を投げる。網の目状になった水が鳥の一羽を落とす。

「きりがないな」

鳥が入ってこられないような細い道を見つけ、入る。網目状に発達した街路は迷路のようで完全に元の場所の位置はつかめなくなつた。

「ここまでくれば大丈夫だと思うよ」

「ああ」

上を見上げ体を隠す。

「なぜ俺たちを狙うんだ」

「さあ」

SOLAが言い、ため息をつく。

「まさよしくん」

「なんだ」

「これは攻撃だよね」

「そうだな」

「敵が名乗ってくれるといいのに」

「ああ、誰が俺達を攻撃しているのかわからないな」  
まさよしは考える。

「あの二人、二人きりにしてよかったかなあ」

「宿に戻るか」

「うん」

なんとか道をさがして元の宿に戻る。

「大丈夫みたい」

空を見ながら中に入る。

ドアをたたいた。

「アサヒ、キラ、無事か」

「どうしたんですか」

キラが聞く。何もなかったようだ。

「いや、鳥のモンスターに襲われて」

「森でも襲われましたよね」

「違う種類だったか」

しゃべっているとアサヒが窓の外を見て強く言った。

「ふせろ」

ガラスを割ってさっきの鳥が突っ込んでくる。

キラが電撃の呪文を唱え出す。

「間に合うか」

体長一メートルほどの鳥だ。モンスターとしてはさほど大きくはないがするどい嘴が威嚇するようにかちかちと音を立てている。

「放電」

ばちばちと光が輝く。眼がくらんだ。

黒こげになった鳥が数羽、落ちる。

「やったか」

「まだいるぞ」

アサヒが銃を構える。撃つ。眼を撃たれた鳥が旋回しながら落ちていく。射撃の腕前は大したものだ。

「これで全部か」

なんとか終わる。窓ガラスが割れた音で宿の主人がやってくる。

「モンスターだ」

とまさよしが言うと、主人は青い顔をしている。

「なぜうちの宿にそんなものが」

「わからないな」

モンスターは都会に近づけないよう、町にはシールドが張られ、見張りも立つ。

「何かが起きているのか」

まさよしはつぶやく。

「何にせよ監視委員に連絡を」

主人にそう言うと、そうですねと言って出ていく。

「なんだろうな」

モンスターマスターがいる可能性もあるなとまさよしが言う。

「モンスターマスター」

「ああ」

「まさか、あいつか」

と呟く。

「追っ手かもしれません」

アサヒとキラが言う。

「追っ手がいるのか」

「はい」

キラが答える。

「先に言うべきだったな」

まさよしが言う。

「国境を越えてはこないと思ってました」

「そうか」

「こっちの国に入ってきてるってことだよな」

「そうですね」

「ここを戦場にはしたくないな」

まさよしは言う。

「そうですね」

「とりあえず夜を待つか、暗くなってから動けばだいぶ違うはずだ」  
まさよしは言う。

「こっちか」

どたどたと足音がする。数人の男が来た。

「モンスターが現れたと通報があったんだが、こちらですか」  
男が聞く。

「そうだ」

まさよしが答える。

「あ、L I Sの方ですか」

「そうだ」

まさよしの所属する会社だ。上着に会社に所属しているしるしであるタグをシャツの腕につけている。モンスターの調査をすることでも有名な会社なので、知っているのだろう。

「モンスターは」

「見たことない種類だったな、バード系のモンスターだ」

「そうですね」

と書類を書きだす。

「どんな感じでしたか」

「絵を描こうか」

とまさよしは自分のペンを出す。

「お願いします」

新しいモンスターを発見した場合に絵を描く欄があるので、まさよしは基本のスケッチ力はある。



「くちばしはこんな感じでサイズはこれくらいだから  
などと言いつつ記入していく。」

「ありがとうございます、助かりました」

「このあたりでモンスターが出たことは」

「ありません」

と、男はいう。

人の多いところは嫌うモンスターは多いが、中には人と暮らすモンスターもいる。

人と一緒に暮らしているモンスターには届け出が必要だ。まさよ  
たちはぼみゆをちゃんと届け出して一緒に暮らしている。

ぼみゆは少女の姿をしてSOLAのそばに立っている。

男たちはぼみゆがモンスターだと気づいていないようだ。

「そうか」

「飼ってる人もいないんですか」

SOLAが聞いた。

「小さなものはペットとして認可してますが」

そうですかとSOLAが言う。

やはり追いかけてきたとみていいだろう。

男たちはなぜこんなところまでと話し合っていたが、引きあげて  
いった。

「行ったか」

まさよしは嘆息しつつ二人を見る。

「厄介なことに首を突っ込んだと思ってるでしょ」

SOLAがそう言う。

「いや、そんなことはない」

「じゃあ、楽しんでる？」

「それはお前だろう」

「バレてた」

「ああ」

まさよしは考えこむ。

「とりあえず荷物を持ってここを出よう。ここにいるとまた襲撃される可能性もある」

まさよしはそう言うと、部屋に向かう。

部屋のガラスも割られている。

「盗られたものがなにかあるかも」

「ないな」

貴重品は身につけているのでどうということもない。あるのは着替えと携帯食が少々。

「袋は？」

「袋？」

「昔ばくがあげた袋」

「ああ、あれは首から下げて持ってる」

小さいものだ。布の袋で、中身は気にしたことはないのだが、首からひもで下げて持っている。

「よかった」

「だいたいなものなら自分で持ってるっていいところだが」  
ものをすぐになくしてしまうSOLAの性格上、自分が持っているのが正解だろうとまさよしは思う。

「まさよしくん中身気にならないの？」

「気にするとまずい気がするから気にしないでいるだけだ」

「ふーん」

おもしろくなーいと言う彼に、まさよしはしばらく考えた。

「お前は一体いつも何考えているんだ」

「何にも考えてないよ」

即答が返ってきた。

「みゆ」

ぽみゆが何か言いたそうに転がってくる。少女の姿はやめたようだ。

「さて行くぞ」

廊下に出るとキラとアサヒが待っている。

外に出て、しばらく歩いて市場を通り抜ける。雑踏の中をはぐれないように注意しながら歩く。

だんだん中央に向かっていくにしたがい人が減っていく。

「この先です」

キラが言う。彼は一度覚えたことはほとんど忘れないという。

「地図は一度見れば大丈夫です」

と言う彼は、こちらに来る前に、この国の地図をほとんど丸暗記してきたそうだ。

「スラム街に彼らのアジトがあるのが分かっています」

「アジトまでわかつているのか」

「ええ、潜入した者がいるんです」

そうか。とまさよしは言う。

「潜入した本人は」

「まだそちらにいて手引きしてくれることになってます」

「そうか」

情報はいくつあってもいい。

「とりあえず俺の知っている情報屋にも連絡をとってみるが、かまわないか」

「はい」

全員で路地裏の小さな立ち飲みバーに入る。客はいなかった。

「すまない、霧の湧く時間が知りたい」

「わかりました、すぐですか」

「ああ」

男は奥に引っ込んですぐに出てくる。

「今日の夜8時にならないとマスターが来ないのですが」

「そうなのか」

「はい」

「霧の時間は無理ですが、次の風の予感はいますよ」

「じゃあそれで頼む」

「わかりました。奥へ」

カウンターがひらいて、まさよしは中に入る。

「ここにいてくれ」

と言い残し入っていく。

薄汚れたフードをかぶった人間らしきものがうずくまっていた。

バーテンはそのフードに近寄っていく。フードが頷いた。

バーテンが部屋を出ていく。

「何を求めてきた」

「情報を」

「なんの情報だ」

フードのなかから聞こえたのは割と若い男の声だった。

「レインボープロジェクトについて知りたい」

「レインボープロジェクトか」

男はそう呟くとぼそぼそとしゃべり始める。

「隣国で行われているテロプロジェクトだ。表向きはテロリストがやっていることになっているが、実際は国が囃んでいる」

「どこでそんな情報を仕入れてくるんだ」

「それは言えない」

男は言うど、金をくれるならもう少し話すが。と言う。たのむ、とまさよしは言って金の入った袋を出した。

男は中身を確認してから、静かに話しだす。

「聞いた話だがな、レインボープロジェクトで捕まった人間を材料にして魔法兵器を作るという話だ。それをこの国に持ち込んで作動させる。国の中枢が破壊されたらテロリストたちが国を乗っ取る、という計画だ」

「そこまでは俺も知っている」

「では、この国での一番大事な場所で行われている魔術にそれをぶつけるという話は？」

「一番大事？」

「ああ、五か所の魔方阵を使った魔術だ。この国を守り発展させてきた魔法」

「ユータムの五方阵か、ほかには？」

「わからない」

男は言った。

「俺が知っているのはこれだけだ」

「わかった」

ありがとう、と言って部屋を出る。

外では全員黙って立っていた。

「どうでした」

「テロリストたちがどこを狙うかがわかってきた」

「本当ですか」

「ただの情報だ、確かめなければ本当かどうかは分からない」

まさよしはそう言う。

「急ぎましょう」

キラが言う。

「そうだな」

まさよしは答えた。

まずキラが、仲間と連絡をとる、と言いだす。

「危険じゃないか」

まさよしは言う。

「そうですね、でも連絡はとらないと」

次の作戦が立てられません。と主張する。

「わかった、じゃあ、別で動くか」

「そうですね」

二手に分かれることにした。

「おれたちはこの会議堂を張るから、お前たちは仲間と連絡をとれ  
まさよしは言う。

不吉な予感がしていた。魔道力を集めたら、集められた人間はどうなってしまうのか。そんな考えが頭をよぎる。まさよしは頭を振

った。

「とりあえず俺たちができる最善にことをするしかないな」

SOLAとまさよしは中央へ、アサヒとキラはアジトへ向かうことにする。

祭りが来るのだ、ここに。その祭りの間に事件は起こされると踏んでのことだった。

「祭りか」

まさよしが呟く。

「雨だ、まさよしくん」

「そうだな」

ぽつ、ぽつと雨が降り始めた。すぐに本降りになる。屋台の屋根を探し、そこに飛び込む。

「みゆ」

ぽみゆははだしの足が泥だらけだ。かといって本体に戻るつもりもないらしく、少女のままだ。何も感情を写さない目がまさよしをじっと見る。

「ぽみゆ、汚れちゃったね」

とSOLAが云う。

雨の中。男たち、女たちがめいめい着飾って出てくる。

中央の祭りが始まると、食事の席で男たちがしゃべっていたことを思い出す。仮装カーニバルだ。

仮装した者たちの顔はわからない。

熱気と狂気が混じりあう祭りだ。

雨が必ず降るのだそうだ、この祭りの日には。そして雨の中ぐしやぐしやになって踊りまわるのが祭りなのだそうだ。

まさよしはため息をついた。雨が激しくなってくる。あちこちのドアから原色の人間なのかそうでないのかわからない人間たち。

「何か来るような気がする」

SOLAが頭上を見る。雲の塊がものすごい勢いでこちらに向かっているのが見えた。

「あれは、雲ではないよまさよしくん」

SOLAがそう言った。

「ドラゴンが来る」

と誰かが云う。

「ドラゴン」

祭りを見に来るドラゴンがいるのだとそういえば聞いたことがある。でもそれはただの伝説のはずだ。

「ドラゴンだ、ドラゴンだ」

雲をまとった何かが勢いよく現れる。

「見える」

SOLAが言う。

「見えるんだ、この町がクリアに失われるところが」

「そんなことはさせない」

まさよしは言う。

この街が死んでしまったら街に野菜を供給している村もやられてしまう。そう思った。利己的な理由だが、大義名分を振りかざして人を殺すよりよほど健全だ。と自分では思う。戦争がなんだというのだ、そんなものただの人殺しではないか。

「僕たちでなんとかできるものじゃないかもしれない」

SOLAが呟く。

「あれは、僕の博士が作っていたものだ」

「なんだって」

「情報として僕にインプットされている。まさよし、僕は僕じゃなくなるのはいやだ」

「SOLA？」

「うー」

と頭をかかえる。頭をふると、何か唱え始める。

「SOLA」

「大丈夫、今情報をうまく引き出してるから」

まさよしはSOLAの冷静な声にうなずく。

「できた」

まさよしくん、なんか書くもの持ってる？ とSOLAが聞く。  
まさよしがペンを出して、紙を出す。

SOLAがものすごい勢いで図と文章を書きだす。

「設計図」

「なんのだ」

「あれに敵対するもの」

「作れるのか」

「作れる。呪文の詠唱が長いけど、やりきるから、ちょっと広い場所が必要なんだけど」

と言いつつ走り出す。まさよしも走る。

雨が顔に当たり、口に入る。

「ここなら」

通行止めされた広場があった。警備の人間が数人いたが、SOLAが放電の呪文で全員を眠らせる。

「行くよ」

「ああ」

広場で、詠唱が始まった。

光が、広場に広がり、円陣ができる。

かちやかちやと音をたてながら円陣の真ん中に何かがつごめき始める。浮かんできた機械がの真ん中に、砲台のようなものがせり出してくる。

詠唱が止まった。

「我が祈りの産物よ、今こそ目覚めよ」

白い光が砲台から解き放たれる。

「行け〜！」

SOLAが叫ぶ。

空に向かって光の弾が飛んでいく。ぶつかった。雲が晴れる。

「ドラゴン」

まさよしが絶望的な声をあげた。ドラゴンとしか言いようのない



ものが空を飛んでいた。その首に当たる。

「あれが兵器？」

「そうだよ、まさよしくん、ここを滅ぼすためのね」

ドラゴンは攻撃を受けたために、こちらに来る。

アサヒとキラが数人の男を連れて戻ってくる。

「間に合ったか」

「ああ」

ドラゴンは、広場に降り立った。

いつもなら市場がひらかれているだっ広い場所だ。祭りで閉鎖されていたため、人はいない。

ドラゴンだ、しかし、あちこちからコードが伸びていて、人工物のようでもある。

「こいつが城を目指しているんだ」

「城に行かせないようにしなきゃ」

SOLAがもう一度、呪文を唱え始める。まさよしはドラゴンのコードをめがけ、突進した。引つ張ると、まさよしを放り出そうとぶんど腕をふるわれた。しがみつки、殴る。ぐにやりと皮にこぶしが突き刺さると、へこんだところから悲鳴が聞こえた。

「なんだ？」

まさよしは、腰から下げていたナイフを持って走り出す。切りつけると、中からぼろぼろと小さな頭が落ちてきた。

「これは」

まさよしは思わず声をあげた。

SOLAがもう一発光を放射する。今度はドラゴンの目に当たった。

頭が、口々に呪文を唱えだす。

シールド、と誰かがバリアを張った。それに向かい、呪文がさく裂し、消滅する。呪文を唱えた頭は動かなくなる。

「気持ち悪い」

「ああ」

精神的に気持ちがいい風景ではない。

「母さん」

一人が声をあげた。

顔のひとつが身内だったらしい。

「ひどいことをする」

まさよしが呟く。

「攻撃できない」

と誰かが言う。

しかし、攻撃しなければ食い止めることもできない。

まさよしは、呪文を唱え、自分の筋力を強化する。走り出す。

いつけとSOLAの声がする。それが外界の言葉を認識する最後。呪文が切れるまで、まさよしは相手を攻撃しつづける。

頭の中が真っ赤にそまる。攻撃されて吹き飛ばされて、立ち上がり、また駆け出す。意識があるのはそこまでだった。

「大丈夫、まさよしくん」

「あ、……ああ、SOLAか」

「うん」

「どうなった」

起き上がる。体中の筋肉が悲鳴をあげている。

「ここで生き残ってるのは僕とアサヒとあなたたち二人だけです」

「まさよしくん、再生の呪文使ってあげるから力を抜いて」

「ああ」

雨が降っている。

「ドラゴンはどうなった」

「飛び去りました」

キラがそう言う。

「町の中に向けて」

雨はまだ降り続けている。

「逃げるしかないのか」

「そうだね」

SOLAが言う。

身体の筋肉が修正されていくのが分かる。

「大丈夫」

「ああ」

黒こげの人間だったものがあちこちに転がっていた。肉の焦げたにおいがする。腹が減っている。旨そうな匂いだと思い、気分が悪くなる。生きていてよかった。

「まさよしくん」

「なんだ」

「街が破壊される前に出よう、ここ」

僕の予言が当たるよ。と、SOLAが呟く。

遠くで落雷の音がした。まさよしは静かに言う。

「殺戮が始まるんだな」

「うん」

無力だった。

「逃げたくないな」

とまさよしは言った。

「今行ったら犬死だよ」

SOLAがそう呟く。

「分かっている」

まさよしが答える。

四人とポミュで、歩き出した。祭りの余興だと思って騒いでいる者たちの間をすり抜け、逃げる。

「できるだけ遠くへ」

逃げていく。街から出て、小高い丘に向かって走る。光が、夜を貫いた。

「戦いじゃない、虐殺だよ」

「ああ」

「こんな光景見たくなかった」  
キラが言う。

「遅かったのか、俺たちは」  
アサヒがそう言い、黙る。

「街がひとつ、壊滅するんだ」

よく目に焼き付けておく。まさよしは、自分の力のなさに呆然とした。

「何か方法があるはずだ」

まさよしが言う。

「次のターゲットは」

「間違いなく首都だ」

「この国の要、魔術で守られた都市」

僕の故郷。とSOLAが呟く。

「行くか」

「うん、でも、作戦が必要だよ僕たちには」

「そうだな」

「先回りしよう」

「僕に考えがある」

「なんだ」

「僕が、まさよしくんに預けたものを使うんだ」

SOLAの言葉に、まさよしは首からさげている袋を服から取り出した。

「これか？」

「うん。とにかくセントラルツールまで行こう」

話はそれからだから。とSOLAが言う。

「なにか策があるのか」

アサヒが聞く。

「うん、たぶん、今は僕にしかできないことがある」  
とSOLAが答えた。

「お前の言うことは大概正しいからな、信じる」  
まさよしは言う。

「うん、信じて」

「じゃあ行きましょう」

キラが言う。

四人は歩き出した。

まさよしは、袋ごとSOLAに渡されたものをよこした。中身は、四角い鉄の塊のようなものだった。

「ここをこうすると」

ばきんと音がして、ふたがはずれる。なかから一枚のカードが出て来る。

「僕専用のカード」

と言いつつにつこり笑った。

「まさよしくん」

「なんだ」

「僕が何をしてもしめないでね」

「ああ」

まさよしはそう答えながら、SOLAが渡してくるものを受け取る。

「ケース、持ってた」

「ああ」

透明なドームを通って、中心に出る。人々の口から、都市がひとつ滅ぼされた話が出ている。

「こつちだよ」

歩く。

SOLAの歩みになんの躊躇もない。  
中心に來ると、誰もいなかった。

「ここはね」

「ああ」

「このカードを持った人間しか基本的に入れないんだ」

言いながら、カードをせまい隙間に挟む。光が包みこんだ。

「サデス、イクスリクス」

小さく単語をいくつか呟く。

「古代語か」

「うん、早く、五分間、誰でもはいれるようにしたから」

走る。全速力だ。

「ここまでは入れれば大丈夫」

SOLAがけろりとして言う。

「お前疲れるとか」

「ないよ、設定されてないもん」

「設定って」

「極限までは動けるようになってるんだ、でも、あるときふつんと動けなくなる。まさしくんも知ってるでしょ」

「知ってるが」

森でいきなり倒れた時、なにをしてやればいいか分からず、困ったのだ。

「僕がここで倒れたら、放って逃げてもいいよ」

「そんなわけにいかない」

ありがとうとSOLAが言って薄く笑う。

「まさかここに帰ってくるなんてね」

歩き始める。

懐かしそうに、並んだ柱の間を通り、扉に出た。

「ここは」

「ここは中心だよ」

誰もいない。

「昔はここに兵士が立っていたんだ」

魔法政令都市の、一番大事な拠点だったところ。

「今はだれもいないはず」

一歩中に入ると、光がしたから吹き上げてくる風とともに目をくらませた。

「ここは？」

「魔方陣のある部屋だよ」

「ここには魔力が詰まってるね」

キラが言う。

「ユータムの五つある拠点のひとつ」

まさよしくん。知ってる？

「噂は聞いてるが」

ユータムの五つの完全魔方陣ですか。キラが言う。

「そう、僕はこの魔方陣を守るために作られたホムンクロス」  
でも、僕は完全にはなれなかった。

「たくさん人がいたんだ、昔は」

「そうなの」

「うん、でももういない」

呟くと、中に入る。

「これは？」

タペストリーがあつた。光っている。

「これは、五つの魔方陣の作動が分かる装置なんだ」

「ひとつ消えてる」

「そう、今、襲撃が始まったんだ」

「そんな」

「ここも襲撃されると思うから、それを迎え撃つ」

そのために、僕はこの装置の魔力をすべて使う。と、呟く。

「まさよしくん」

「なんだ」

「パブで今度タラコスパゲティおごつてよ」

「ああ」

「じゃあ、僕はこれから魔術の練成に入る」

言いながら手を前に出す。

「キラ」

「はい」

「アサヒさんと一緒に前衛を頼みます」

俺は物理的な力には強いから、肉弾戦に入る。とまさよしが言う。

「ここで止めななきゃ」

SOLAが呟く。

そうだな。とまさよしが言う。

「じゃ、構えて。すぐ来るよ」

SOLAがそう言い、台のうえに描かれた魔方陣に手をかざす。

「ユータムの五方陣」

呟く。

「これを壊すということは」

「ああ」

「この国の転覆がかかってる」

ゴウと、音がした。

身構える。

「最終兵器」

起動、と小さくSOLAが言う。まさよしはその言葉にぞくりとふるえたが、何も言わなかった。最終兵器。かつてこの国にあったという兵器のことだ。

ユータムの五方陣の下にひとつずつ埋められているんだよまさよしくん。と、SOLAが呟く。

なにをしても止めないでくれと言われたことを思い出し、まさよしは集中する。

突風とともにドアがひらいた。

一人の少年と、大きな獣がドアを壊しながら入ってきた。

「お前たちはだれだ」

少年が言う。

「お前と敵になる者だ」



まさよしは言う。

「そうか、では殺す」

「殺されないよ」

SOLAがそう言うのと右手を差し出す。

それが兵器か、とまさよしは言う。SOLAの腕に、機械が絡みついてた。

「いけ」

白い光がほとばしり、獣を貫き、ドアに穴をあける。

獣は自分になにが起きたか分からない間に殺されてしまった。

少年はこちらを見て、何が起きたか分かったようだ。

「何者だ」

「まさよしさんと愉快的仲間たち」

SOLAが、真面目にそう答える。

「まさよし？」

「俺の名前だ」

今日は強化呪文を唱えられない。魔力を身体に感じないからだ。使い切ったのである。

少年が身構える。

まさよしが走る。

「遅い」

動きを見きり、腹を一発なぐる。少年は血をはく。

アサヒが銃をつきつけた。

「殺すのは待って」

SOLAが言う。

「殺せ」

少年が言う。

キラが黙っている。アサヒも黙ったままだ。

「聞きたいことがある」

「なんだ」

「ほかの場所でも同じような攻撃をしているが、大本はなんだ？」

まさよしが言う。敵が分からない状態で動くのは危険だ。

「そんなことは僕は知らない」

少年はそう言う。

「知らないか」

まさよしはしばらく考える。

「ただ殺せるって聞いてきた」

と答える。殺せ。と少年は言う。

「僕は死ぬか殺すしかないんだ」

「君は、」

「なんだ」

「ホムンクルス？」

「そうだ」

なぜ分かる、と少年が聞く。

「波長が僕に似てるから」

SOLAがそういうと、腰に手をあてた。

「自我があるんだ」

「自我？」

「本当に死にたい？」

「そんなこと聞かれたことがない」

「死にたいかどうかは自分で決めていいんだよ」

「何も知らないくせに」

「そうだね」

SOLAは笑う。

「僕は自分が何もしらないということを知っている」

まさよしがため息をつく。

「こいつお前と同類なのか」

「うん、同類っていうか、後継種？」

「そうか」

「人間じゃないよ」

「SOLAって人間じゃなかったの」

キラが言う。

「うん」

まあ基本的な成分とかは似てるみたいなんだけどね。と笑いつつ、右手をかまえる。

「ちよつと君の魔力をもらうよ、後で回復するから大丈夫、でもしばらく邪魔はできないようにするね」

「な」

「痛くないから大丈夫！」

光が右手から迸り、少年を包んだ。少年がぐりとひざを落とす。

「と、いうわけで戦闘不能！」

明るい声にまさよしがふうと息をつく。

「この調子で次のところに行くよ」

「大丈夫か」

「なにが」

「お前の魔法力が尋常でないのは知ってるが」

「大丈夫大丈夫、僕のキャパシティは、海くらい大きいよ！」

なんだか、ちよつとハイテンションなのが余計に気になるが、気にしないことにする。

「外にもいるのか」

「分からないけど、でも大丈夫だと思う」

僕がまさよし君の分も戦うから。と呟く。

「死ぬなよ」

「大丈夫」

腕をぶんぶん振りまわし、歩き出す。

手を前にかざすとドアの周りの壁を焼き切り、外に出る。

「細かいザコはまさよしくんたちに任せるね」

「おう」

外に出ると、空が赤く染まっていた。火の色だ。

「燃えてる」

「ああ」

キラとアサヒがそう呟く。

めまいがする。吐き気も。なんだ、と思う。

「大丈夫」

「ああ、大丈夫だ」

強い呪文を使ったあとの副作用だろう。魔力を使うと人はどんどんむしばまれると言う。魔法使いがこの世界で忌み嫌われるのはそのせいだ。しかし魔法を使う人間はあとをたたず、それなくしては生きてはいけない者も存在する。

「暑い」

「そうだな」

ユータムの呪いか。予言通りなのかもな。まさよしは言う。都市伝説があるのだ、まさよしの住んでいた田舎でも知られている、いつかくる崩壊の時を知らせる前兆としての戦いが。

「行くぞ」

全員が歩きだす。

燃え広がるビルから、人が飛び降りている。地獄絵図がそこにあった。

「走り抜けるぞ」

「はい」

走る。水をかけている魔道師もいるが、いかんせん火の周りのほうが早い。

「中心部を目指すぞ」

まさよしは火の粉をふりはらいながら走る。全員が、中心まで来ると、あの機械でできたドラゴンが塔にまといつき、おおんと鳴いたのを聞いた。ぞくりとした。下りてくる。

「僕が前衛！」

「大丈夫か」

「誰に言ってるの！」

笑いながらハイになっているSOLAが手を開く。

「いけー」

ドラゴンの吐きだした光を押し返し、じゅわんと音をたてながら光がドラゴンの頭を覆った。

光が消えると、頭のないドラゴンがゆっくり崩れ落ちる。

「やったね」

身体から光が放たれ、四方八方に伸びる。

「まぶしい」

キラが言う。

「壊れていくな」

「うん、まずは一体目」

「まずは？」

「うん、たぶん、まだいる」

気配がするよ、すごく大きな、邪悪な気配がする。と言いながらにこにこ笑う。本当にうれしそうに。

「壊れてないかお前」

「わかんない」

あはは、と笑う。しかしこいつに頼るしかない。

「大丈夫、大丈夫」

「お前は」

何を考えている？ とまさよしは思う。

「復讐か」

「うん？」

「いや、なんでもない」

自分を作った者たちを、こいつは復讐したいのではないかとまさよしは時々思う。だが、こいつはそういう自分を殺している。とも思う。人間でないということが恐怖に変わるほど、SOLAを信じていないわけではない。こいつはこいつで生きているのだ、と思う。

「このまま突破して、あれを目指すよ」

「あれ？」

「そう、真ん中に塔があるでしょ、たぶんあそこに降りてくると思う。魔力がたくさん眠ってるんだ」

「なんでそういうことを」

「知ってるんだろうね、情報が脳に刷り込まれてるんだ」

うん、と答える。

「ね、まさよしくん」

「なんだ」

「僕、役に立ってる？」

「ああ」

「よかった」

僕ねえ、役にたたないから捨てるって言われたんだ。と呟く。

「最後に役に立てばって、研究所に入れられるのにも抵抗しなかったのにね」

なんで今こうしてるんだろ。と呟く。

「人生間違っちゃったのかな」

「そんなに間違ってもないだろ」

「うーん」

僕はけっこう僕を作ってくれた組織に恩返しがしたかったんだけどね。裏で動いてるでしょ、組織、ねえ。

「キラくん」

「……、気づいていたんですか」

「ま、ね」

「なんの話だ」

「ちよつとね」

「アサヒくんも分かってやってるでしょ」

「まあな」

「俺だけ知らないことがあるのか」

「まさよしくん、仲間はずれで寂しい？」

「……、話せ」

「うーん、どこから話せばいい？」

移動しながらSOLAは話を始めた。

「僕がいた研究所では、僕たちホムンクロスを使った魔法実験が行われていたんだ」

そのなかで、僕は生れて、っていうか合成されて作られた。

「そのとき同時に進行してた研究が、合成による魔法兵器の研究なんだ」

僕はその実験を見てる。とSOLAが言う。

「僕らのメカニズムを応用してるんだよ、まさよしくん、いわば彼ら兵器は僕の兄弟なんだ」

と、SOLAが言う。

「悲しい兄弟だけだね」

まあでも、僕は弟たちを殺すよ。

「僕たちは生れてきたらいけなかったんだ」

そんなことはないと言ってやればいいのか、まさよしは考える。生きるということを考える時、まさよしはいつも分からなくなる。自分がこうして生きていることに意味はあったのかと。そう考える捨て去られたもの、という意味で、まさよしはSOLAと同じだった。

「って、考えてるときもあるけどね」

とSOLAがつけくわえる。でも生きてるんだ、僕たちは。

「まさよしくん」

「なんだ」

「生きて帰ろう」

うん、生きて帰りたい。と、呟く。

「僕がホムンクルスだと知ってから、予測したはずだね、二人とも僕は残念ながら洗脳された個体じゃないから、君たちの敵じゃない」

「洗脳されていない個体」

まさよしは言う。

「洗脳されるほど優秀じゃなかったってことだけど」

でも、博士たちは僕のことを見くびってたんだ。数値に表れないキャパシティの問題だね。僕はほとんど無尽蔵に魔力を吸収できる。使い切ると倒れるけど。

「無尽蔵」

「そう、僕は体内に魔方陣があるんだ」

それが魔法をため込む空間とつながっている、と言うと、ひょいと片手をあげた。

「来るよ」

走るよ！ とSOLAが言う。まさよしはそれを追う。飛来する翼のあるモンスター。手の甲から現れた刃物の切れ味をためす。

「けっこう切れるな」

大量虐殺にしか使えないと、まさよしが装備しながら一度も使っていない道具だった。空中から刃を取り出し、透明な刃が現れる。ふだんはこつい指の出せる黒い手袋と言う感じだ。

走りながら両手をふるところもりのでかいようなのがどんどん落ちる。頭の中で考えるより早く、敵を認識し、切る。それも急所を。「早い」

キラが言う。魔術を使うのはセーブしているようで、後方で細かな敵を殺している。

「さてと、僕の力を試すときが来たかな」

試さないほうがしあわせだったんだろうけどなーと呟きながら両手を前に出した。

白い光が周りを包む。

「キル！」

と叫ぶとあちこちでぶしゅうという音がした。

光でよくわからなかったが、光が消えてしまうと、だんだんあたりがみえてきた。焦げくさい匂いが立ち込めている。飛んでいたコウモリ系のモンスターを全部焼き殺したのだ。しかし光は、目には影響がないようでわりとすぐにはつきり見える。

「よし、ザコは死んだ、と」



でもまだ来るなあ。  
と呟く。

コウモリ系のモンスターを周りに囲まれるように、大きなドラゴンが飛行してくるのが見えた。

「あれは」

「あれが僕らの敵」

覚えていろよ、君のこと。SOLAが歌うように呟く。

「さて、まさよしくん、」

「なんだ」

「作戦がある、んだ」

言葉が壊れ始めている。とまさよしは思う。たまになることだ。

「たくさん敵を一点に集めるにはおとりがいる」

「ああ」

「キラくんとアサヒくんは二人で一組、まさよしくんは西ルート、僕は東ルートを通る」

「わかった」

「死んじやだめだよ、みんな」

「お前もな」

「うん」

じゃ、走るよ。と走り出す。

間もなく三つの道に分かれる。

「じゃ、ユータムの一番高い塔で落ち合うよ」

まさよしは走り出す。腕を振りながら身体にまとわりついてくるモンスターを切って切って切って切り殺す。

「うおおああああ」

呪文を唱えなくても頭のなかは殺すことではいっぱいになる。呪文を使うことによる副作用だ。

副作用が起きていることを感じながらしかし意識が少し残っている。真っ赤にそまった視界が、まさよしを狂わせる。動け、殺せ、走れ、殺せ。

まさよしが先に着く。

塔にかけのぼるコードの化け物のようなドラゴンを見上げる。

科学と魔法の結合を提唱したコラール博士の夢だったという塔に。

SOLAがコウモリの群れを引き連れて走ってくる。

「逃げ足は速いんだもんー」

到着！ と叫んで後ろを向いて両手を広げ、白い光があらわれ、それを投げてモンスターをい消し去る。

「どうにかやるしかないな」

まさよしが呟く。

SOLAがまた前を向き、塔を見上げ、笑う。

「あははははは」

SOLAの周りのゴミが、彼の周りに舞う。両手を前へとゆつくり差出し、光を集める。円盤になった光が彼の手からふわりと浮かび、頭の上で大きく開いて、急にぎゅんと音を立ててドラゴンに向かっていく。

刃がドラゴンの皮膚に当たるたびにドラゴンの身体に小さな爆発が起きる。光はそのたびに小さくなっていく。

最後に目らしいところをつぶした。

ドラゴンがおたけびを上げる。

降りてくる。まさよしが走る。

「時間をかせいで」

「わかった」

パンパンパン。と音がする。アサヒの銃声だ。

「間に合ったなキラ」

「そうだね、アサヒ」

誰もが逃げ出す不穏な空気の中、まさよしたち以外生きた人はいない。

「キラ、魔法は使っちゃだめだ、こいつは魔力を吸うから」

SOLAが叫ぶ。

まさよしは死体をよけながらドラゴンから伸びた触手をぶった切る。何本もの触手が伸びてくる。それをすべてよけながらすきを見て触手を切っていく。

SOLAの呪文の詠唱が始まる。

手を胸にあて、歌うように。

昔むかしの力よ

僕に与えよ、その力を

「キールギース、サプラ、エイリア」

古代語らしき言葉を吐き出すと、SOLAは手を大きくひらく。

「来い」

手を上に高く掲げて、丸い光の輪ができる。小さいものなら見たことがあるが、こんなにてかいは初めてだ。

魔力を物理攻撃に変える呪文だと前に聞いたが。

「行け」

ぶん、と光が高く音もなくつかび、ドラゴンの首をしゅぱんと切った。

大量の血液らしき黒い濁流とともに黒い光が流れだした。それがSOLAに向かい収束する。

「SOLA」

「大丈夫、受け入れるだけだから。魔法を」

ふう、満腹。と呟く。ポミュが転がってくる。

「満腹？」

「うん、別腹なんだ」

「別……」

「とりあえず、このドラゴンさえなんとかあったなら、あとはしばらく攻撃もないと思うけど」

「ああ」

隣国も同時テロなんだよね、そっちはどうなったかわかる？

「ユータムの中央以外はそんなに被害はなかったな」

「そうだね」

キラが、何かを取り出す。

「無線が復活したようです」

「そうか」

「そっちはどうなの？」

キラが聞く。

「うん、うん、わかった」

テロリストは、国が弱体化してしまうと支配する意味がないと判断して隣国には大した攻撃はしなかったみたいで、助かりました。

「そうか」

「向こうの仲間たちがなんとかしたようです」

「とりあえずの脅威は去ったわけだから、街のセキュリティの強化は、それぞれにやってもらうにしろ、僕たちはここから逃げたほうがいいね」

「そんな気がするな」

「うん」

全員で走り出す。

後ろで、塔が崩れだし、まさよしはその音に一回だけ振り返り、あとは走り去ったのだった。

「お世話になりました」

ふたたびリグラートの片田舎で、ささやかなお別れ会をした。

SOLAは帰ってから熱を出し、寝ている。

「ふにゃあ」

「起きてくるな馬鹿」

「だってお見送りくらいしたいー」

ふにゃふにゃ言いながら出てきた。

「お世話になりました」

キラが言う。

「何にもしてないよー」

SOLAは笑う。食べすぎはよくないねーとだけ言う。魔法を大量に食らった関係で、身体が不調なのだ。と本人は言っていた。帰ってきてパブで酒を飲んだのが原因ではないかとまさよしは疑っているが、黙った。タラコスパゲティも大量に食べていたし。

「じゃあ」

アサヒが言う。

「うん」

お元気で。と言うと、二人は酒場を出て行った。

まさよしは、大きく伸びをした。

「さて、と」

「ん？」

「お前は寝てる」

「うん」

いい天気だ、洗濯でもするか、とまさよしは思った。白い毛玉姿のぽみゆがみゅーと鳴いた。

「熱が下がったら、セイさんのところに行こうよ」

「そうだな」

「おとなしく寝る」

「そうしろ」

と、日常に戻っていくのだった。

（後書き）

読んでいただきありがとうございました。長さが中途半端なため、公開する場所がなく、眠っていた作品です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8917u/>

---

まさよしとSOLA 食あたりになったのは、僕のせいじゃない

2011年7月24日03時39分発行